

「祖父が教えてくれた幸せと後悔」

いちき串木野市立羽島中学校一年

山口 やまぐち 藍杏 らん

三年前のクリスマスイブ。妹と一緒にはいしやいでいる時、家の電話が鳴り響いた。電話に出た私は祖母の困惑している声に驚きすぐさま母に代わった。電話を切るのも忘れ飛び出していく母に、当時小四だった私はただ立ち尽くすだけだった。数分後救急車のサイレンが聞こえ祖母の家の方に進んでいく。まだ保育園の妹と二人で残された私は怖くて仕方なかった。その後、すぐ父が迎えに来て病院に着いた。廊下を祖父が運ばれていく。病院には家族全員揃っていて、みんな深刻な顔をしている。母が私に教えてくれた。祖父は脳梗塞という病気だった。祖父の家の近くで軽トラの中で倒れていたそうだ。祖母の不安でいっぱい顔。強がっている母の姿。脳梗塞がどんな病気か知らなかった私でも現状を理解するのには十分だった。

祖父の手術は無事終了したが、左半身に麻痺が残った。それでも、「じいちゃんが死ななくてよかった。」と心から安心した。祖母は毎日病院に通い、母が勤めていた病院でもあったため私もよく面会に行った。「手をグーにして。」と言うと右手をグーにしてみせた。喋るのは難しかったが、時々書くしぐさをするので、ペンを持たせた。「らん」と私の名前を書いたり「テレビ」と書いて用件を伝えたりした。寝たきりで喋ることもできなくなったが、退院した時は親戚全員が集まりお祝いをした。

平日の日中は訪問介護の方が来てくださるが、祖母の負担は大きい。土日は母と叔母で交代の介護。だが、祖父は熱を出してまた入院となった。退院しては入院を繰り返して一年半が経った。この頃、新型コロナウイルスが流行り始め病院は面会禁止に。祖母でさえ祖父に会えない。どうしようかとみんなで悩んだがどうしようもなかった。祖父はやっと退院できることになり私も久しぶりに会うことができとても嬉しかった。それから熱を出すことがあったものの祖母と離れ離れは可哀想と入院させずに自宅介護を始めた。

現在、祖父が家に帰ってきて九ヶ月になる。未だに熱を出すことが多いが調子がいい日に「調子はどう？」

と聞くと、首を横に振りダメだと伝えてくる。祖父の麻痺がなくなることはない。寝たきりであることも変わらない。それでも私は今の生活が幸せだと思う。今、生きていてくれる。いつ祖父がいなくなってしまうかわからないことを身にしみて感じた私は祖父がいて祖母がいるこの生活が幸せだと気づいた。もちろん後悔はある。もっと祖父の健康を気遣っていれば、食生活に気を配っていたら、倒れた時早く気付いてあげられたら。だからこそ、祖父の体調はもちろん、自分自身の健康に気を付けながら、高齢の祖母や忙しい両親の健康にも気を配っていききたい。今ある幸せを大切にするために。